

## は し が き

横浜港は1859年の開港に始まり、埋立地の造成、京浜工業地帯の形成、埠頭建設、国際貿易港として発展してきました。この発展に伴い白砂青松であった浜は、埋立による閉鎖化及び工場排水・生活排水の流入等により、一時「死の海」と呼ばれた頃もありましたが、近年は法律の規制によりかなりの水質改善が見られます。しかし、私達はこの間の横浜港の水質・生物等水域環境に関するデータをほとんど把握しておりません。「温故知新」という諺が示すように、現状を評価する上でも過去のデータは貴重であります。近年、南極・グリーンランドの氷柱から過去の気象・環境に関する知見を得る試みが成されております。これと同様の手法で、底質柱状試料から過去の水域環境に関する知見を得ることが可能であります。本報告書は、横浜港から採取した底質柱状試料の堆積年代及び貝類、有孔虫類、介形虫類、渦鞭毛藻類、珪藻類、花粉という6種の生物化石分析から横浜港の生物史を解析したものであります。今後、横浜港の水域環境をさらに改善するための諸事業が実施されることが予想されます。その際等にも、この資料は有効に活用できるものと思います。

また、解析及び執筆を担当して下さった「横浜市域の古環境研究会」(代表 松島義章氏)の方々に心からお礼申し上げます。

1995年3月

横浜市環境科学研究所

所長 米山 悦夫